

慶応義塾大学図書館・情報学科におけるコンピュータ教育*

小林 胖**

1. 図書館・情報学の意義

“コンピュータ教育”は、いうまでもなく、カリキュラム全体の中で、その意義と方法がきめられるであろう。さて、慶応義塾大学文学部の図書館・情報学科は、1951年わが国ではじめての大学課程の図書館学の専門学科として開設され、今年で20周年を迎えるわけである。その15周年を契機として、1967年より大学院修士課程を増設し、翌68年から名称を図書館学科から図書館・情報学科と改め、名実ともに時代の要請にこたえるようにしたのである。

これだけをとれば、いかにも順調な発展をとげているようである。しかしながら、この20年間について他の大学に同種の専門課程ができなかったというネガティブな事実は、ますます大きくなってきており、今日わが国の図書館・情報学のビジョン確立の遅れとすらなっていることを深く反省せざるを得ない。

2. 国内情勢の進展

コンピュータに対する図書館界の一般的姿勢は、一方では非計数情報の処理への適用の遅れ、他方、社会資本としての図書館事業の著しい後進性に原因して遅れていた。そのうえ、漢字入出力の問題がある。この意味では、日本科学技術情報センター（JICST）の現用システムが1969年からフル操業にはいったことは、やはり画期的な事象であり上記の3点、すなわち、非計数情報、文献活動、および漢字入出力を統合した形で科学技術情報サービスが着地し、より高次のシステム問題を提示するのである。

国立国会図書館では本年中に、JICSTと類似した漢字入出力可能なシステムが動き出す予定である。このシステムは“図書館”にとってはより直接的な関心となるべきものであり、JICSTのシステムと相まって、文献情報活動に対するコンピュータ応用の高まりがようやく期待できるようになったといつてよからう。

3. 現カリキュラムの制約

このような国内の情勢において、図書館・情報学科は明日のためにどのような手をうったかということが当面の課題である。いま肯定的にいえることは、学部課程では図書館学本来の科目を切りつめることなしには、新しい科目を入れる余地がなかったということである。したがって、67年の修士課程新設の際は、いわゆる情報学関係の科目を重点的に修士課程に盛り込み、とくにコンピュータ使用技術は“情報処理機械論”に集約し、これに実習も含めることとしたのである。この結果、学部課程と修士課程とは整合性が低い形になったことがいま反省されている。その反面、学部課程修了者は、重複するところが少なく、すでに修得した図書館学の知識に加えて、コンピュータ利用技術を軸とする情報学（文献処理）を発展させることができるものと考えている。

その代わりに、他学科修了者に対しては、入学と同時に学部課程の図書館学の中核課目の履修を要求し、そのために最低3箇年の在学を必要とするカリキュラムとしている。

修士課程においても、狭義のコンピュータ技術は正味、通年1時限（4単位）と若干の実習にすぎない。これでは、いかにも不十分であり、学習効率を高めるために、今後は上記科目履修前にコンピュータ概論、あるいはプログラミングの基礎などは、別途に開設されている講座（単位としては未だ認めていない）の履修を予定することになる。

ハードウェアとしては日吉のキャンパスにある“情報科学研究所”に次のシステムがあり、

IBM 7040

TOSBAC 3400

また三田の当学科に周辺機器として、

IBM 0029-A22 キーパンチ

0083-001 分類機

0088-002 照合機

各1台を備えつけ、便宜をはかっている。

狭義のコンピュータ技術以外には、情報分析論、情

* Computer-oriented course at the School of Library Information Science, by Yutaka Kobayashi, (Keio University.)

** 慶応義塾大学図書館情報学科

報システム論、および検索論を柱とした学科構成で、非計数情報の処理、ファイル構成、検索などを中心としている。

4. その成果

以上の総合的効果として、一応の成果をあげたと考えられる原因は、i) コンピュータの利用者として、学習目的および意欲がはっきりしていること、ii) 図書館学の履修により、書誌的データおよび主題の分析・表現の意義を理解していること、iii) 一部の学生は在職あるいはアルバイトより、かなりコンピュータの経験をもっているものがあること、などが考えられる。

たとえば、過去3回の卒業生の修士論文中、コンピュータを用いたものは次のとおりである。

自動分類に関する考察および新手法
 情報検索におけるリスト処理
 逐次刊行物処理業務の機械化システム
 電算機による IR 問題処理システムの設計
 自動索引システムの設計
 IR における機械翻訳の実験的研究
 受入業務の機械化システムの開発研究

いずれにせよ、卒業後、コンピュータを使用する部署に配置されたものが十分その任務を果たしているばかりか、他の学部学科卒業者とは異なった“情報処理”技術をもっていることも認められていると聞き、当事者として一応安心している。

5. 新しい情勢に即応するために

私どもの学科が目標としている“図書館・情報学”は、もちろん理論的に深めなければならない点も多いが、また一方では現行の実用システムの動向とも深く関わっている。上述の JICST あるいは国会図書館のシステムは、最終的には国際システムに組み込まれるべきものである。すでに3年ほど前から、たとえばアメリカ医学文献分析検索システム (MEDLARS) や同じくアメリカ化学会の Chemical Abstracts Service (CAS) のように、わが国へ公式に参加を要請しているもの、あるいは国際原子力情報システム (INIS) のように、国として参加の意志を明らかにしたものもある。

これに対する政策論や戦略論はさておき、世界はいまや、とくに科学技術情報の場面では、電算機システム化の大きな流れの中にあり、わが国もその波を十分

かぶっているということである。それゆえ、国際システムの受け手、あるいはこれへの送り手として行動すべき人材の充足は緊急を要する事態である。

[図書出版——国立図書館についても、アメリカが打ち出してきた MARC II システムが、科学技術情報におけるのと同じ事態をひきおこしており、これに対しては国立国会図書館が対処することになっている。]

わが国の図書館情報活動の GNP に比しての立おくれに対して、人材養成の責任を負う私どもとしては、さらに現行カリキュラムの改善によってこたえなければならぬと考え、今年4月からその準備にはいつている。その一つのねらいは前述のような学部-大学院間の整合度を少しでも高めることである。しかしながら、学部課程の学生全員にコンピュータ教育をすることにはふみ切れない。もちろん、使用時間、指導員、経費の問題もあるが、それよりもむしろ本質的なものとして、図書館・情報学そのものに関わるものである。図書あるいは記録された知識は文化の store であり、これを local needs に即応するよう組織付けを行ない、地域あるいは社会集団ごとにサービスするという社会的機能を見失いたくないからである。

一方において社会の要求の変化は加速されつつあり、他方、記録手段・媒体の多様化がすすんでいるとともに、社会の変化もまた急テンポである。図書館は歴史上まれにみる大きな岐路に立たされているといっても過言ではない。このような変革は種類を問わずすべての図書館が直面していることである。したがって、いま考えているカリキュラムの改訂は、学部課程では記録手段・媒体の多様化をふまえての新しい図書館の位置づけと、わが国の実情に合った形でのコンピュータ技術への導入を(たとえば選択科目として)考えることとしている。

大学院課程のカリキュラムについては、まだ十分煮つまっていないので、私見に属するが、できれば実用システムを材料として、それらの批判をとおして、新しいものの開発の方向付けを行ないたいと考えている。コンピュータ技術の面では、機器の大型化と、オンライン化の方向が決定的であると思われるが、これについては、果たしてどの程度私どものような私立大学がついて行けるものか、十分に承知しないのは、まことに申しわけないことである。

(昭和46年8月11日)